



武家閑談  
坤

增  
775  
105

























石の傳へ譜代なる正判家小舟ありておむとすべし  
是と拙名と其面目とを辨れよ正判家なりて丹波  
又使ありて手紙切し入しれり後中津一服清しと  
切りしと内このものと多しとす——丹波より先年買り  
原より傳氣勢の通しれりて家より討れりしと  
それとより指當しと丹波より物とせありと世  
めて中定らとより手紙よりしと定り書心  
と手紙と脇巻紙よりつけらるるありて定り書心  
清しとせありと拙名の武意牛角と戰場小舟と合致と  
よりよと原の指當と拙名よりんや拙名の拙名と  
何とせと原譜と手紙よりしと定り書心と合致と

丹波は一表りて同じく帰く侍家よりいれおの志  
なりとありて決て仕よ又清一とありて拙名清り  
ありとありて何れなりとありて拙名清り  
ありとありて何れなりとありて拙名清り

一 二列ありて後七印記を信七記の類より志は藏の七本  
記を本園記よとまよひ七本記を何れと記と云は侍  
元人の日記よりまよひたりとありて或何れ并ちあり  
親方おぼろしより毛繼殿とありて水と海と遊年  
ありて何れおぼろしより書付記とありて初より志向  
記を天正十三年八月ありて二日の合戦とあり  
産書あり元丸とあり孫七とあり合戦同日あり丸山の



















の女あまた一人お女と云りしは、  
ト一人の男と云りしは、  
文念と云りしは、  
神の御中、  
侍系粗と云りしは、

一 夫久保お徳と志津、  
十郎と云、  
お世うあわれ、  
ありと云、  
お初月、  
一 重りの刑、

ト云ふは、  
切支丹、  
時分と考、  
ほ収束、  
まゝと供、  
お徳と、  
考り、  
うあ、  
おと、  
お名、  
君は、



トウの或人ハ、是故中法実の終ニ修シ、力とシ  
キんより一紙して果たらし、句也、然れども、より系  
中法ニ至るも、や、おぼろしく切て、其ハ、大と、城へ、  
云、新し、そのれ、上、紙、し、人、を、散、布、物、南、北、の、正、し  
二、条、の、所、城、も、も、印、門、し、く、と、き、し、世、の、構、と、人  
解、り、し、大、繩、紙、を、き、み、り、り、お、ぼ、ろ、ろ、ハ、是、と、す、少、尚、系  
より、お、ぼ、ろ、ろ、中、法、實、杖、一、つ、と、お、州、皆、行、成、り、方、へ  
派、し、た、れ、は、河、中、皆、約、り、り、能、法、形、又、は、法、を、り、と  
云、あ、り、り、主、法、記、也、も、も、く、お、仔、掃、部、部、お、ぼ、ろ、ろ、  
對、面、し、何、と、そ、く、中、法、を、せ、く、き、ぬ、を、は、法、法、每、半  
と、中、法、を、た、法、中、日、け、も、は、い、法、法、先、教、を、

多、く、ハ、法、法、法、と、入、字、を、君、法、法、法、を、法、法、  
可、法、法、法、小、法、法、法、を、た、い、つ、と、く、主、法、法、法、法、  
き、ん、と、中、法、を、り、法、法、法、を、人、と、世、を、て、感、や、ぬ  
也、也、也、

一、其、の、法、法、法、法、法、法、法、法、法、法、法、法、法、法、法、  
九、法、法、法、法、法、法、法、法、法、法、法、法、法、法、法、  
初、法、法、法、法、法、法、法、法、法、法、法、法、法、法、法、  
秀、法、法、法、法、法、法、法、法、法、法、法、法、法、法、法、  
う、と、大、法、法、法、法、法、法、法、法、法、法、法、法、法、法、  
邦、法、法、法、法、法、法、法、法、法、法、法、法、法、法、法、  
小、下、知、し、法、法、法、法、法、法、法、法、法、法、法、法、法、法、















一 吉田長 依を殊に公死に依り加賀越前依和山の  
軍兵に就是際より六月六日巻田口へ渡り一河邊  
跡系とせり今亦方後取不流耐改次成豊前守  
務永と申合亦事由の由分人知んと約束せり  
ともみ宿務約米のともみ色より平野へ流片山と  
我我お燈日向と流成不流流与流改相平と絶与  
た明作並跡系と合我相別より依人より流討罪と  
うとけに二書より依り小我を亦言い後升ちより依り  
吉田長 依を巻田より依り跡系と合我跡系是誓と  
お取と巻田へ世世と物と物とひしは跡系より息吉田  
大物作流十の成めく高名より依り後と流系は

系り翌七日の合我ぬに在馬 依を秀頼と馬の知り  
事延門よりと約の公大物と人換より此へ入り  
と流より合我始り うと吉田跡系と大塚流あ  
吉田大塚より二の在馬 依討罪平の成より是を  
と親前より直流の家人跡尾に在馬 討罪吉田の首  
ともお知して衆よりせんがうと世は使者吉田跡  
係与信尹よりとそそ公に知るる亦も言ハなきと  
得気よのともと在馬と吉田跡系代り抱麻の角の  
骨より流跡系よりめた是ハ我甥吉田長 依をそやの  
衝二好ぬけてとてとて口と衆名れハ果して  
そ由とそよとそよと吉田の首より



一 越前忠孝公使高き令に九を了る蘭外りて其公使高き  
皆病ふべく各々其病苦を以て甲州浪人系衆人  
仇目胤と云共にも使高き令に九を了る蘭外りて其公使高き  
を所治せし如く小なりと云言へる系衆人と推察す  
相違種々の地をなり御高路りしは其言も小敬  
重し一礼拜を息大物と曲解二三書物と相違後  
系衆人一と云言へる一と云言へる一と云言へる一と云言へる  
今公使死すは信力あり高き令に九を了る蘭外りて其公使高き  
信力あり一と云言へる一と云言へる一と云言へる一と云言へる  
の大功と云言へる一と云言へる一と云言へる一と云言へる  
如後一と云言へる一と云言へる一と云言へる一と云言へる

某天子も一五年の内は討死して其思定之とて際終の終  
よあれは其説より高き令に九を了る蘭外りて其公使高き  
先代代之の言を以て高き令に九を了る蘭外りて其公使高き  
高き令に九を了る蘭外りて其公使高き令に九を了る蘭外りて其公使高き  
回向よと云言へる一と云言へる一と云言へる一と云言へる  
智のくく一と云言へる一と云言へる一と云言へる一と云言へる  
一生浪人として年十五から年廿一まで一と云言へる一と云言へる  
其下下の理ん事一と云言へる一と云言へる一と云言へる一と云言へる  
年人も海流流し一と云言へる一と云言へる一と云言へる一と云言へる  
親湯又抄く勇力雅と云言へる一と云言へる一と云言へる一と云言へる  
系衆人として一と云言へる一と云言へる一と云言へる一と云言へる



道三の六文後取合ふく指さる白鶴重く門戸一  
三回ゆらりと打家六文逃家て解り糸細のく新  
重くは合敵のく八城と彼邦をくれぬまて市場の  
合敵なり下一 天皇も新入宮に一 東方は去軍  
の敵をうけおし法ん種八敵て討死うはは入合  
一入鶴籠あまると言ふりして又海島あま来たう  
是う今生は暇をたう一 又其とさう一 叔重の  
其と信一とく 叔重も及まおる果して翌年  
四月七日の夜宵と名し一件は馬の宗討死一とる  
一 能知のれ  
一 是は難読の 後取合取の二部と名西のく秀松は

出生者といふり又去其地理も其男は後取合と  
いふり而後より一 地なり一  
一 大坂時今福軍作行上取小堀のく 地の利も  
十分揚文地と聖旨 市常孫山同たて 時地は  
順足成上取防備の西のり 府上取地を分城へ  
法地と名り人との地は出取出巡見の時の作法  
好美のく一と 相系防可場道筋砂とりり  
とさう一 掃原の地一 常孫の地を人地とて  
出取地は実て出取の地 常孫の地は作はる  
南赤のく一 東方人教者行はる地は常孫の地  
出取の地は常孫の地一 是は常孫の地の常孫の地



















と居るは少人兼程と感しり

一 越前州の北東にありて大坂府城の時に一書金取家其教  
に七百四十つといふ行書百字の斗百七十二と云  
前金取の字を長と人其教早之金取の時に多  
行書と云ふ其教に教子と云ふと日撰より前金取行  
書と云ふと云ふ家子其教に長とありありと云ふと  
伊豆守の八家子に其教八百七十と云ふと八早之に其教  
多と云ふと前金取の字を長と云ふと七万の字の長と  
云ふと其教百七十と云ふと其教に其教に其教に其教に  
より其教に其教に其教に其教に其教に其教に其教に  
其教に其教に其教に其教に其教に其教に其教に其教に

く河と云ふ別れ其字に分む其教と云ふと其教に其教に  
伊豆守の別れ其字に分む其教と云ふと其教に其教に  
浪人其の字に其教に其教に其教に其教に其教に其教に  
其教に其教に其教に其教に其教に其教に其教に其教に  
其教に其教に其教に其教に其教に其教に其教に其教に

一 唐橋浪人其約定と云ふ其教に其教に其教に其教に  
其教に其教に其教に其教に其教に其教に其教に其教に  
より其教に其教に其教に其教に其教に其教に其教に其教に  
一 撰の大將山室と云ふと其教に其教に其教に其教に  
山室一撰と云ふと其教に其教に其教に其教に其教に其教に



















前へ至り思ふに徳の事一 国兵を討ち取らるる事  
部を心入る事とされ成り御座りし事入る事又  
くその事ありし中へ此後定むる事  
お城の本におぼれし徳の儀とに任する事  
と物置

一 お城の陣におりし七日の夜に敵の兵ありし事  
手とて巡りて成りし徳の儀とに任する事  
徳の事ありし中へ此後定むる事  
会属しし事の徳の儀とに任する事  
誰とて巡りし事の徳の儀とに任する事  
お城の本におぼれし徳の儀とに任する事  
お城の本におぼれし徳の儀とに任する事

此の事ありし中へ此後定むる事  
徳の事ありし中へ此後定むる事  
会属しし事の徳の儀とに任する事  
誰とて巡りし事の徳の儀とに任する事  
お城の本におぼれし徳の儀とに任する事  
お城の本におぼれし徳の儀とに任する事  
お城の本におぼれし徳の儀とに任する事  
お城の本におぼれし徳の儀とに任する事  
お城の本におぼれし徳の儀とに任する事  
お城の本におぼれし徳の儀とに任する事







大物とてついでに觀成士の威をせらるる事なれば  
利成大物ありて父母とてまじりて身とて威を成入る  
秀頼公は此の由依に記されし其途をてり  
登へし一書時のあまは出さしむり可夫の威  
生より男ありてまき結しおこし威を入るしとて  
其時より威を成入るしとて大物に威を成入る  
威を成入るしとて威を成入るしとて威を成入る  
いんてく別ありて父を成入るしとて威を成入る  
おまもも威を成入るしとて威を成入るしとて威を成入る  
ひしとて威を成入るしとて威を成入るしとて威を成入る  
威を成入るしとて威を成入るしとて威を成入るしとて威を成入る

倉入能成七の初めとて威を成入るしとて威を成入る  
夫倉入りしとて威を成入るしとて威を成入るしとて威を成入る  
のそ中より一石に半の曲輪とて威を成入るしとて威を成入る  
とて威を成入るしとて威を成入るしとて威を成入るしとて威を成入る  
何と威を成入るしとて威を成入るしとて威を成入るしとて威を成入る  
大物の中へけ入るしとて威を成入るしとて威を成入るしとて威を成入る  
此中の中より威を成入るしとて威を成入るしとて威を成入るしとて威を成入る  
中より威を成入るしとて威を成入るしとて威を成入るしとて威を成入る  
いんて威を成入るしとて威を成入るしとて威を成入るしとて威を成入る  
よとて威を成入るしとて威を成入るしとて威を成入るしとて威を成入る  
いんて威を成入るしとて威を成入るしとて威を成入るしとて威を成入る



甲斐守とてく不徳とあひ大助の侍とま寄と成るハ一昨  
日登田のくも手柳をりきり打言をり言後と地子  
負りしりと手柳と痛く秀頼様をこびく心おぼし  
と申す意もありの言をればと成るハ一昨日入人と病  
奥河内守方と送り知んとすし一危を大助ハ  
いしとせし品と多佛唱と祭り手別秀頼と  
此生業ありしと男女二十二人道員若して夫命に  
出瓜撒り礎とまうりぬ吉田大助と澄脱と胎十  
文字よかき切十の蔵とく終りぬる人少人過  
哉とぬる端やくと登ぬ若ハありし  
一秀頼と此意取の山依二十二人の内と橋守と節十の蔵

あ肥直の節十七歳と橋守十の節十の節何と秀頼と此  
中姓し意取の節上宮よと痛たを治成湯と月付  
より二人の思ふ姓と吉田大助とを初めたり加敷  
海平と武田の若人湯とくおせよとく治成湯とく  
二人の内小姓と吉田大助何家持の具脱と人内向  
よ並ひとと念念佛とくわし唱言おとくあり  
礼取の腕取人一夜の夢とくけしと記とく切取  
とく海平とた若人湯とくおせり脱捨湯と咽り  
とくわ  
一寛永六年二月十五日水崎原の城より吉田守治湯守  
と人御付とく吉田守とく吉田守とく吉田守とく















二人三人あり又捕れしる働ありもさ働ハ成しと争  
もの亦多し一山中城の一両家と川本惣兵衛の藤内色  
家原公内戸田門吉山虎と物なりしう後色  
吉井大徳氏一力と五内辰新十郎長秋とも  
丹作掃部内日る新源を印討北江新江家と道ね  
付と云々さうける水取九と者とお付と戸掃部氏に  
味しと曆との侍人しとさう城海とる年  
弓矢の匠しと計勇士の言名取抄る年珍し  
くさうのまうひおき事ととあく味と一と日取  
討れしうらよ抄る新江家とお付と旬日院抄り水取  
九と海を院抄りさね切取と付とさうと抄部主人の

馬の老衰つうゆ流とと天地権別をり事と智角末  
世に成るる武士お道と衰とらうと高唐海成せ  
うれまは言唐息ハ元孫の次出先と法抱取の柳泉  
仔藏書院者院の月采女とあ人 歳有る  
時より初は也

一渡野集の家人水の流者と病者とくけ走る  
事お目と之ある者内とハ何の病者と何の役  
まのまると知ふ水の是とさう侍人といハカとまを  
治也約ハ割の志のこゆと云病又病者よるへう  
らと云と云抄りぬくとと取方流梅と部とを討れ  
るを飯もさ付とく抄部と病者よ者とい



息災人といふ物なる人と云ふは、  
初と書くは、権柄井もまきく、  
と守動も書一人う名のこ言、  
陳の時九月十日官楳嶽川もく、  
ち徳方やをいお枝さ、  
ゆりるもゆりおく、  
此藤おのり、  
と中よる、  
おをぬる、  
物記作あり、

此れをそ人の被白糸様、  
お知大坂の、  
高取の、  
とと、  
とを、  
此、  
高、  
此、  
と、  
多、  
形、











吾人然一毛と筆指おのりて上杉にやうめんを  
祓給くゆ高家へつくり家光よりり記付抄書に  
らをいさく

一 後藤氏に書きたる考者公成の子山内印とてこの女の  
和安年よりけりて高生氏に奥初知入る所た書よ  
考ひくはとて小徳正一揆の河十とていふ言ふ  
此高の家ゆくい先程徳正の言をりしとて考  
此の考をこれ一少飯万作と山内印天下の美をこ  
氏に没後信人として成之とて又冠仁とてしれ考  
とてせうす山内印とて信の初めと考とて流の所  
徳正同書に書きたる考者よめれりす并井好とて考

とて一うへ後飯高太守小隆の通小流一淨満記とて  
りと娘の人形と書きたる一む半あり上流とてりお  
つあり信の一人とて是れあめたり好娘とて山内好  
教書に書きたる考者よめれり山内好もは信の正  
考りて二条山城に書きたる考者よめりて一に考よ  
大平のりあめ井戸とて書きたる山内好もは信  
かりに信一人とてりとてり山内好もは信と  
とて信の正もわらきとてりとてり信の正もわら  
信一人とて書きたる考者よめりて一に考よ  
考書に書きたる考者よめりて一に考よ  
りりあり打よとてりとてり信の正もわら















人極重く〜と云ふ事なり本意の極く〜と云  
と云ふ〜と云流〜と云と人〜と云大極と感  
古候事なり〜と云り

一村を奪取し通清を藩別來信を奪取し以て升す事あり  
うす〜大割の事あり〜十四日初陣の藩別主生  
川より〜味方御軍は内表奪取し只一人存し合  
少言紀布にまう〜一村を初陣奪取し一馬り  
山崎を奪取し社を合款と実なり〜軍は勝る御  
邑は御軍の社信初の下津井方より御軍は信長  
云御生表の御藩別日言御軍は〜の御御軍は  
追あり〜は御人廣信御軍は〜の御御軍は

秀忠云〜大軍と云はる向廣信御軍は〜御伊豆  
事不はれ欠御軍は〜御丹波小園御軍は〜と云  
云大園御軍は〜御丹波御軍は〜と云  
欠御軍の事不はれ御軍は〜と云村を奪取し〜御  
丹波御軍は〜御欠御軍は〜御若方御軍は〜御  
御云人御軍は〜御御軍は〜御御軍は〜御  
御云〜御軍は〜御御軍は〜御御軍は〜御  
合款〜御軍は〜御御軍は〜御御軍は〜御  
御御軍は〜御御軍は〜御御軍は〜御御軍は〜御  
御御軍は〜御御軍は〜御御軍は〜御御軍は〜御  
御御軍は〜御御軍は〜御御軍は〜御御軍は〜御















この甲よ音もさうも然れ川は付して孝地と持ふと  
トハ舟田中を助たり信正と之助と呼ぶ柄に  
ゆくと加増の百名の之助真一と一飲一書  
重と秋と勝とありさうさう品とさう仕世との  
了管を酒目と此加増の本知係は仕とく紀は  
と之退池田の家輝政へはあつていつの後大  
邦久を助と打果しとさうと此田中を助元と  
登城少く漁登の港本中付るはさうさう世と  
所川を助と定勢河能より之条河原へ川を  
名物の人へ元由さうと名物たさうと名物の  
人へ所を助と結とさうと門と西の河を助と名

縄とさう一打りしてあまの日本と此田中を助  
いさうと裁中梅万人三川と船港之内はさうとけぬ  
けさうと種の大旗とあつては

一人の物持さうと名物打つ河原に記す物一高  
と名物を信正の細智と名物細川を真一  
と名物と

一可也也元者長と名物元は仁世と名物とさうと  
名物也元と名物とさうと名物とさうと名物と  
年名物時何能元は名物と名物と名物と名物と  
名物と名物と名物と名物と名物と名物と名物と  
て四年名物と名物と名物と名物と名物と名物と



高よそとそと弱しく不斗計と云ふ元寇中てそと  
人し奇ふといふより誠なる事と甲冑兵杖  
帯弓とそとまゝとてさふふ若衆のそと迷ふりしそ  
が年一とそと岩と信作とて帯と杖と也岩は  
大権現の御日とそと死んとしりしと果しと六月  
高りよとそと藤の物とて長口と物高礼と  
けりけりしと息絶りし人の首奇物とてとまじと  
唐語の夫婿とてとそと地所御と藤のそと石橋の地  
尾初御衆の任人可児と元寇長とそとそと  
往來の人とそと活巻の筋にむとそとそと  
元寇のそと竹内久造とてとそとそと

てとと元寇のそとそとけ之とそとそとそと  
関白秀治とそとそと秀治と西條軍とそと元寇とそと  
とそとそとそとそと日蓮とそと成とそと福徳  
とそとそとそと七面とそと抱りしと元寇のそと  
とそとそとそとそと久造とそとそとそと  
一 加藤清正とそと大寺伊豆とそと一戦清正自身は地  
と物とそとそと十年一月月とそとそと時清正と  
地とそと徳とそと所行所徳と成とそとそとそと  
一回の戦をり物とそとそと所行とそとそとそと元  
東行徳とそとそとそと所行とそとそとそとそと  
のそと人の物とそとそとそと大寺伊豆とそとそと



清正十文字池実行し行徳瓜拾ひ佛本坂の社  
内入を納し今も重なる人々をたすむし一見  
相違なきなり清正の地と名する人の内十文  
字の月叙しと云春月の徳と云又さやの徳と  
徳の毛換子を馬路抄し痛病人を治すも一  
節播く徳載るれ徳徳前よりそとく

一か徳地増すた原を又清正と名を別なり或  
物終りた原の田家を力と名する所を十  
人口もあれは言ふに徳二徳と名するハ先徳地  
部を分るんれは力と名する所は徳元  
トた徳を力と名する所は清正徳と名する

一徳とく徳原の徳を徳成人共徳よ徳と名する  
つたは河内徳原とく行徳用んしとて今  
定りしと云徳原曰か一徳なり徳出る河内  
もく徳又云徳地と名する徳生方なりもさや  
徳と名する徳地と名する徳と名する

一馬の長政帝に信りて徳十徳徳なり  
徳一徳名手徳原と名する所ありたは人  
徳と名する徳地と名する徳と名する  
徳と名する徳地と名する徳と名する  
一高徳徳大門合徳と信するにたの徳徳徳



百騎より多くありし小早川隆景一池二万との金銭  
なり初書如程を無推た浪老尉亦十万余も山海  
園と云鴨綠江を渡り朝鮮に入小西按察使の長  
左将少く大村新八松浦利朝の法中一宗對馬  
吉原二万八千とく榎蔭の平塚城と攻取り小  
西と進一朝鮮の都へして押来る朝鮮の人  
池加一二十万騎あり左友弼統も洞山城より  
一々進一とあり小早川隆景を同政府より  
つり却りお望と迎之方と大河より何馬田長  
海久留來侍次秀包と白川と表湯より小西大  
村と池城より一々進一隆景を同政府よりゆみしり

ちの二十万と門法一我して一打果と端ありあひ  
りりと想大に備前中細と秀助の石田治兵衛の備前  
増田重利尉長盛大谷刑部が備前吉原の都御とあり  
却へり河内より進一難波法華寺の法書へ  
一而は法書のみをとりて中城一と隆景を家日本の海  
海兵初より再日本海船の心をしむ朝奉平に  
法書と家書とありあひるのふとく病犯せんといふ  
ふと城の心しむる法書とあり何よりいひ  
海兵と隆景とあり十八新しとも掃くしてちの  
二十万に成金切先より大船と船一合戦して討  
死と送りしりお望のふとく死たるといふ討































か番と百日も分れたと流流より切くせり猶おぼ  
入くまをとりてしし時を秘流流の二子おと  
せん先控報し一特書より打入んとありひしし  
中を親と子と願とをとりて流流をたす方す  
おと及方おととせしおと及方おととせしおと  
姓と好く流流のやとふ包とら物と流流し是と  
流流をとりととと流流と流流のしとと流流のし  
ととと流流のしととと流流のしととと流流のし  
死生の境おれを分おとと流流の命を成る死  
物より流流のしとと流流のしととと流流のし  
ととと流流のしととと流流のしととと流流のし

流流のしととと流流のしととと流流のし  
成すしととと流流のしととと流流のし  
何れもととと流流のしととと流流のし  
ととと流流のしととと流流のしととと流流のし  
せんしととと流流のしととと流流のし  
せぬものもととと流流のしととと流流のし

武家閑話記巻八 大尾



洪書以水山氏藏本書寫之

中書浩字少  
後日務校合

時天保十二年五月十七日中村萬喜直道



